

信楽峻磨先生を偲ぶ

龍 溪 章 雄

二〇一四（平成二十六）年九月二十六日、本学会の元理事、名誉会員の信楽峻磨先生がご逝去された。満八十八歳を迎えられて一週間後のことである。ご葬儀は、九月二十九日、広島県呉市のご自坊安楽寺にて厳かに執り行われた。安楽寺門信徒、先生のご生前法縁を結ばれた人々、全国各地の門下生を初め、大学関係者など多くの有縁の方々とともに参列し、先生をお見送りさせていただいた。

龍谷大学赤松徹眞学長は「弔辞」の中で、「先生は真宗学を国の内外の学生に教授なさいました。アメリカで出版された著書 *The Buddhist World of Awakening* は今も世界の人々に読み継がれています。先生は『浄土教における信の研究』により文学博士を取得されました。ひとえに親鸞聖人における信心と念仏の意義を解明し、世俗権力や権威への迎合、追従することなく、真実に照らされて、御同朋御同行が敬いあう教団の再生、世界の平和を願いながら浄土

に向かって生き抜いていくことを教えてくださいました」と、真宗学者信楽峻磨先生の人物像と学問像、思想像を端切に語られた。在りし日のお姿を想起して遺徳を偲び学恩に謝しつつ拝聴したことである。先生は「行動する真宗学者」であった。

先生は、一九二六（大正十五）年九月十九日広島県賀茂郡教円寺に生まれ、長じて広島青年師範学校在学中の一九四五（昭和二十）年七月学徒徴兵により北海道旭川部隊に入隊。日本の敗戦後、一九四六年五月龍谷大学専門部入学、三年後には文学部仏教学科に入学し、やがて一九五五（昭和三十）年三月龍谷大学研究科（真宗学専攻）を卒業された。一九五八年四月に文学部助手として龍谷大学に奉職され、講師および助教授を経て、一九七〇（昭和四十五）年四月教授に就任された。一九九五（平成七）年三月定年退職されるまで、三十八年間にわたって真宗学一筋に学究生活を

・送り、教育者として有為な人材を育成された。その間、一九八一（昭和五十六）年文学部長に就任、一九八九（平成元）年からは学長として二期六年間にわたって大学運営の任にあたられた。

一九八〇（昭和五十五）年から本学会の理事として、また後には幹事として長年にわたり務められ、日本仏教学会理事、真宗連合学会理事長など、各種学会の要職を歴任された。一九九五年から二〇〇八（平成二十）年まで仏教伝道協会理事長として、故沼田惠範氏の願いに応えて国内外における仏教伝道事業にご尽力されている。

先生は、大学ご在職中はもちろん、名誉教授となられてからもしばしば、浄土真宗本願寺派のハワイ開教区、北米開教区における各地の別院や仏教会を初め、ホノルルに在る仏教研究所（BSC）、バークレーに在る米国仏教大学院（IBS）等を訪問し、開教使や信徒の求めに応じて親鸞の真宗仏教の精髓を語られた。The Buddhist World of Awakening (BSC, 1981) はその代表的な著書の一冊である。二〇一三（平成二十五）年二月、ロサンゼルス別院等への出講が最後となった。『真宗の本義』（法蔵館、二〇一四年七月）はその時の講義録である。先生晩年の一つの志願は二十一世紀にお

ける仏教東漸であった。

信楽先生の学問的業績は多岐にわたっているが、体系的にして主要なものは『信楽峻磨著作集』全十巻（法蔵館、二〇〇七～二〇一〇）に収録されている。とりわけ『改訂浄土教における信の研究』（第一巻）、『改訂 親鸞における信の研究』上・下（第二巻・第三巻）、『真宗教義学原論』Ⅰ・Ⅱ（第六巻・第七巻）は、お若い頃より一貫した問題関心に導かれて研鑽を積み重ねてきた真宗学者としての先生の本領が最も発揮されているもので、初めの二つは、もとはそれぞれ一九七五年、一九九〇年に発行されたものである（いずれも永田文昌堂）。うち前書は浄土教理史分野での研究の集大成で学位論文ともなったもの、後書は真宗教学史分野での成果であるが、真宗学を志された先生の問題意識から言えば両書は一对のものとして位置づけられる。

先生は中学生時代、地元の多田蓮識師との値遇が縁となって、広島に伝統されていた石泉学派の学問を学ぶ機会を与えられ、真宗学への関心が芽生えたのである。実は先生が龍谷大学に学んだ背景には、「信心とはそのまま称名をはなれず、生活に即するもの」とする石泉学派と「信（信心）と行（称名・生活）を二元的に分けて語る」本願寺伝統

宗学との、親鸞理解をめぐる対立矛盾に悩み、その疑問を解くためであった、という経緯がある。先生の真宗学研鑽は、その中核をなす「信心」に焦点を絞って進められた。親鸞以前の浄土教理史における行道の展開過程を信の思想を核として解明し、その作業を基礎として親鸞とそれ以降の教学史における信の思想の変容の跡を検証した。そして、「真宗における信心の本義を明らかにするについては、何よりも先ず、親鸞聖人以前の浄土教理史についての研究と、親鸞聖人それ自身における信の思想についてこそ研鑽すべきであって、親鸞聖人没後の教学解釈は、すべて排除すべきであることは当然である」と提起している(以上、『改訂浄土教における信の研究』「序文」)。これは信楽先生の真宗学における終始変わらぬ基本的スタンスであり、また方法的立場をめぐる結論でもあった。

一方、『真宗教義学原論』は、大学での講義(真宗学概論)等が下地になってその後のたゆみなき研鑽の成果を結晶させたものである。「私の生涯をかけて学んだところの、私自身における私の真宗学の集大成」(「序文」)として、先生ご自身によって位置づけられている、言わば「信楽真宗学」の帰結として生まれたものである。内容は、「真宗教義学

序説」「真宗教法論」「真宗行道論」「真宗信心論」「真宗証益論」の全五章から構成された、新しい「真宗教義学」の提唱である。その「真宗教義学」は先生によれば、「親鸞によって体験され開顕された真宗の本質を、現代の大衆に向かつて、それが普遍妥当なる真理であり、世界人類にとって究極の帰依処であるということを、論理的、体系的に、弁証し宣説するところの学的営為である」と定義されている(「真宗教義学序説」)。特に第一章「真宗教義学序説」では、これからの真宗学の基本的方向性、方法論が後学への願いを込めて熱く語られている。先生は常に主体的領解の重要性、歴史的解明と諸科学の援用の必要性、そして伝統的教団教学の徹底した相対化を語られていた。また「自己の生きざまに連動する営為」、そこに学問としての真宗学の特徴があるとも指摘されていた。そうした「信楽真宗学」の方法論の個性が端的に表出されている。

先生の真宗学はさらに、真宗伝道学、真宗求道学といった実践的領域をもカヴァーしている。壮年期には教団改革運動を展開し、多くの発言を残している(『真宗教団論』永田文昌堂、一九七五)。また宗教多元化時代への発言(「宗教多元主義と浄土教」『親鸞と浄土教』法蔵館、二〇〇四)、生命

倫理問題への発言（『仏教の生命観』法蔵館、一九九四）等、時代社会の諸課題と対話しつつ真宗学者として誠実に応答されている。さらには、ご自身の戦争体験を踏まえて、「兵戈無用」（無量寿経）の平和観を真宗倫理として語り続けられた。

先にも紹介したように石泉学派とのご縁もあって、行信論をめぐる先生の学説は「称名」を重視したものであった。そのため異義の嫌疑をかけられて本山に呼び出されたこともあったが、終生ご自身の立場は変わらなかった。親鸞浄土教の仏道を「称名の道」——「聞名の道」——「信心の道」として本願救済の衆生における体験的プロセスを規定しつつ、しかもこれら三者は究竟的に一如のものとして成立すると理解された点に、先生の行信論学説の特色が見られる。信心については、仏と私についての二元的対象的な理解ではなく、一元的な「めざめ」体験であるとする。親鸞の「往生」思想を現生における宗教的経験として了解されたことと併せて、伝統の枠を破る先生独自の救済観が脈打っている。

近年の出版に属するものでは、親鸞の主著の講読である『教行証文類講義』全九卷（法蔵館）、学術的成果を踏まえ

て一般人に平易に語る「真宗学シリーズ」全十卷（法蔵館）等があり、円熟した学説、思想が語られている。なお、先生の著作の多くは、毛利悠氏を中心とする門下生の人々の手によって編集刊行されている。

『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻（龍谷大学、二〇〇〇）の明治期以降の学校時代における宗学の近代化、大正期における「真宗学」の成立、戦時期の戦時教学の形成、戦後の真宗学の再展開等に関する原稿を、当初先生と共著の形で書き進めていくことになっていたところ、私の不明で草稿の完成が大幅に遅れ、そのうち先生が学長に就任されたため「君に任せる」という状況になって、先生と連名の原稿が不可能となってしまった。当時を思い起こして、慚愧の念とともに先生の遺影に合掌したことである。

（平成二十七年二月九日）